

「牧師室」(2016年2月14日)

ここ数年の間わたしは、2・11の集会を、教団名古屋教会で、「中部キリスト教靖国神社問題連絡会議」が主催するものに参加していましたが今年は、講師に関心があり、「信教の自由 東海福音主義者の会」の主催する集会に出向きました。

会場は、名古屋駅から北に7分程の場所にある「在日大韓基督教会 名古屋教会」でした。講師は崔善愛さんで、ピアニストでもある方です。同基督教会の小倉教会の牧師を64歳まで勤め、20年前に亡くなられたご尊父の影響を強く受けた方です。指紋押捺拒否の運動に親子で献身されました。『ショパンとわたし』と題する著者もあり、世界的なこのピアニストとご自分の関係を、共に祖国を追われた音楽家と位置づけられました。崔善愛(チェ・ソンエ)さんは、ポーランド語の言葉「ジャル」を引き合いに出し、それは、「悲しみ・悲哀」の意味で、「本来あるべきものが、そこにない」状態であると、話されました。

指紋押捺制度は2000年に一度廃止されましたが、2007年に再度復活したのです。ショパンは、その後ポーランドに戻る事が出来ず、「パリ・ポーランド文芸協会」に身を置き、音楽活動を続け、結局、祖国ポーランドには、生涯帰ることはできませんでした。特記事項として、1989年1月、昭和天皇が亡くなった時、指紋押捺制度は、廃止されますが、同時に「国歌・国旗法案」が成立します。

崔さんが強調されたことの大切な一つは、「国境が無くなるのが人間にとって大事な事だ」と言うことでした。そのために、わたしたちは、国境を無くしたいというイメージを持たねばならず、そのイメージによって国境は本当に無くなるというのです。